



弄花二之三

特別
A12
5090
2



4
5090
2

<2001-055>-

治平
明石
名虎
久留

うきうき
あま

松尾
うきうき
わきうき
し女
玉川

小様
かぶ象
筆大
野分



須磨 コトシノ浦合ハキモカキヨウ極ヤクマヤクカキモク

冬迄心算多引牛といふ春ハ海兵共才三月の入り
次年々々の入りあり

常一とわのりりく 海兵と名流少くともはち
けりけりや幸國アといふりけりてさそふり
ちしり竹むりあり

このときも 海兵海浦に浪居すは行そん行年中加
りかたれり之田は魚の名目種ノ際ヨリテ東征す
と海兵用とメウといふ者重相面交な片ノ文章府
したせらうしは年野おろし浪波(ア)多しけりし例り
ちりは未譬言合一途うるとり天(ア)成ノ一男とありま
ふはせしりうし

逢よりきりし 川をわきに行きしとき

わたりし門かきよと 川をわきゆきしとき

源氏向ふすべし 川をわきゆきしとき

入道まきりし 有葉まきりしとき

趣入るるとき

二月七日のりし 而も左大臣のとき

六十一

まきりしとき 例のまきりしとき

あまた有るまきりしとき

まきりしとき 例のまきりしとき

まきりしとき

まきりしとき 例のまきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

まきりしとき

丁未のゆいへん 左大詞

一はつへのふしきとし 左大詞の源氏とていふは

金吾をいしうらむくひむかひなり 左大詞

つてそと 一とすまはれいれおとまひ古きあやかり

洋とく列とてふまをえ 幸おまひつと

まていゆまなりいさし 源氏詞

たも今わらわ 毎を祈りくくくくくくく海を

きしりくくく

かりくくくくくくくくくくくくく どのくくくくく

まをくくくくくくくくくくくく 二条院

殿しかりくくく 源氏

ゆきくくく 源氏

大之 臺盤の教とてなり

ちをくくく 折りくくくくくく

三ノホトタマヤリ 後成アしハワレ秋ノ存カラ悲ケシニ

ナハクハハハハハハハハハハハ

初世ニハサカツラテ 源氏詞

サスラ 乱散軍ハモワケニ 昔ヤカシモトハズ

ノ上ナキナレ

虫の月の入る月夜 源氏の月乃入言う身も思ふ

竹の例ノトハ毎夜ハ又乱るハ中助ヲ君列ハ時

ワヤホスエ

わくくくく 川をみひしりく

月夜のやとわ 今もん乱る軍ハハハハハハハハハ

いそぐり品各列ノラシキウツワニモセス隣ノモカタノ
女ヨミサニハアハシリキ

そはまをのこいん 川守付キキモモ言ハルモトト目シ

沙宮の中督中將守シ 二条元源氏沙宮ノ人

守守守守 賤月夜のさくのさしを其守り守りのヤリシ

らにほつら八月のまこもせ

つものれを侍けり くらまのさくつにミツワ

えはさうノカシカマキキ也 源氏

幸逢セナキトハ二条元元トヨリナリキキキキキ

月ハニモ是ホトアラハシタラフウキヤセ和信也

守守守守のさくも くらまのさくも又色ノキキキキ

わらわちをさくも 何事トモモエス 二条元元也

西ノ月朝ノキキキキキのさくも 二条元元也

ハ村の奥ノ名所ノ天曆後ノ又二条元元也

也後ノ時代同トモ也

いそぐり品各列ノラシキウツワニモセス隣ノモカタノ

西ラハシニモ二条元元ノ九元元ハハハニ条元元也

送七月八日也 和部

ふりし 山後也

右近ノ重ノ孫ノ 中川氏守守守守守守守守守

也ニアリ

くらりあさるをいせしきく殿也 二条元元也

けろろいそりのをいせしきく 右近ノ重ノ孫ノ

うらり

ききひるやいそふし

折良月ノ書がれり

海島に古伝くや我ら遠く三月ノ夕

トツラニ思ひ入道ニ交りて

王命アとウリミえ 入道ニ交りし

楊乃りりすむら 友遊こ

ととるさつし

少人トモりて 吟泉院

をけしきくつめいれけり 食心

とらんともいひききと 開成 源ノ書

こまじゆり

叶良月 月まるといひ

とらるる 予しゆり

折の日の書 ば白の書

折りりりりり 海島の書

長くとてきつらりりりり

少人トモりて 吟泉院

まじゆりの書 一日に書

他ゆりりりりりりりり

大に書 大に書

とらるるりりりりりりりり

こまじゆり

とらるるりりりりりりりり

とらるるりりりりりりりり

とらるるりりりりりりりり

あつちのちうり 伊勢物後のちうりちうり

手梳りのちうり ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
又津脈ちうりちうり

ニチ守のちうりちうり 三十二日外通行まじり

のれに三十二日ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうり 田んちうりちうりちうり

ちうりちうり ちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
月と三十二日ちうりちうりちうり

ちうりちうりちうりちうり ちうりちうりちうりちうり
二季にちうりちうりちうり

大敵も三季のちうりちうり ちうりちうりちうりちうり

ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうり

ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり

ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり

一劫

ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり

ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり
ちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうりちうり

疾を痛きしものなるをいふにこれいかに
無人の心いかに

いかに心はなほ 惟て言 松の終る身は
しつらふはらばれはしと云ふに
なすよりいかに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

おのころしすれはしと云ふに
おのころしすれはしと云ふに

とありて見るしてなり

ありてのまゝ 武蔵のこゝ

とては思ふとて一とてまゝと 武蔵のこゝの風を

とてのまゝとて思ふとて一とて源中へ入るれは人のま

とて道とて思ふとて九宮とて思ふとて友人のまゝとて

源中痛所の方とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

又物守とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

趙高半とて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて

ゆきまのまくらりりしはたのゆり糸出せり

花のちりしはたのゆり糸出せり
たりのまくらりりしはたのゆり糸出せり
かひあふみの花田にまけのまくらりりしはたのゆり糸出せり
わさのまくらりりしはたのゆり糸出せり

ふゆい 見るとはえいり物さるるーおが

ふゆい 見るとはえいり物さるるーおが

のまくらりりしはたのゆり糸出せり

サモトミ

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

ほらまくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

まくらりりしはたのゆり糸出せり

つるまやん 人形うつり

八百五 神書三三三三三三

ト行しつらし風吹そ、ノ行ミトさうすなりり風五

の夏とみりういふは流石の久く飛来らさういふ

師いふ多き感天変するの術く、アリ、テ終ニ海京

まろくともわらふはつる人

うきうきとさうりくら、三三鏡 彼のまろくもななる電光一

ふきりとも、大津白まうらうの比流んかていふか

とまゆし入テ、人さめられけり、むる

うきまると神のたごけし、神ニテモ 仁者明神い、ド、い、之海

神ニテモ

まげめとらひ、八百四、日奉託、八百五共、

あど海の中を龍王の、辰火と出見す見ホソク、ワ、ウ、イ、ウ

うらりうらりうらり、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

さく、術ヲメ辰火と出見すう、海中に入す、ウ、豊三

玉珠ニアセ、ま、三三三三三三 珠満珠うエテ、帰ノ竹、す

うりはま、三三三三三三 三三三三三三

松がやけし、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

とくし、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

天意名日月、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

あ、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

か、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

ま、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

サ、三三三三三三 三三三三三三三三三三三三三三三三

所く有り 流く無きものとも有りとも又有り
より有り 延長は川文子・文母して信じてしつるを
ケリ又信じてしつるを

長とくし 源公切流のしし
月ありのこ 下村かこ
杜詩續書在屋梁下

心通セリ

くを くら左近の文は門とて長くし又有りしと
みやそ竹を 竹の世の長はくもの心也

源公切流 良は七

とくし 良はく文は懐き居てし便し
あり百の目ん 百の上とて事してし上は月より有

十音し 長あつた

風を程くし 月入る名サキツる思ふ是
長は之し 侍長たりしを勝斗に

年かん 進みしその有りし心

何れも有り 上ありし有りしを是し有りし
るの有りし 長をくし事ノ長ノ長ケラタキ

ミシヤル所ニキルノ字ナラシハ也 長也
わき下りし有りし有り 信じてし又年齢し有り

長とくし 老子經文ニ
年有りし有りし有り

ありし有りし有り 年有りし有りし有り
ありし有りし有り 川字あり

興とありて

三條真の心

三昧堂にて

行の事也

月日若くは 入るる事なり

冬 宗便法を以てするなり

竹心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

此の心はるけり

花のちのありりりり

三葉のちのありりり

ねりりりりりり

いりりりりりり

ねのちのありりり

延喜名沙のりりりりりり

乙女名のありりりりりり

君のちのありりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりり

てまねし守りよせお 一五五ひりしとせ

らとけりしと 源氏の流せ

ひよりけりしと 入道のきせのいよひにせり

ねとせりしと 源氏と又松平のいよひに

ねとせりしと せりしと 足利の流せ

こまのくちとせりしと

思ふはくちとせりしと ねとせりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

見たりしと 入道のきせのいよひに

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

ねとせりしと ねとせりしと せりしと

吾人の此やうな苦難に逢ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を

吾人の此やうな苦難に逢ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を

吾人の此やうな苦難に逢ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を
尋ねてはねばならぬと云ふは又一倍に源を

よきとちやうとさういふつらうとちやうと
きてむ絶するや能く二六

りて丁未のよしちのこのの ありていり入る

んち事つきのりつとくすつたのちのちのちのち

このころち事つきのりつとくすつたのちのちのち

らんちすつたのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

丁未のちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

ちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

北より定まるとあるものより
年よりね 派を定むるを二年 又のまゝ
は年一降流のよりなり

南に居るに 左大臣の所^{ヒテラ}に 礼を教の世に
是のよりとて

事としを 谷泉にあり

六月よりより 明石を懐妊せし
京の北にありしよりなり

月よりね 七月よりなり 元暦の六月

次期に禮を教のけい^トより功の
が功よりなりとすし

このころよりなりとすし

ちややく増也 ちややく増也われ行々
いさるはちまていばつ^一のま^一のち^一のち^一のち^一

この所のよりなりとすし
ちややく増也

一とばいしとて 一とばいしとて

一とばいしとて 一とばいしとて

この所のよりなりとすし
一とばいしとて

ちややく増也 ちややく増也われ行々
いさるはちまていばつ^一のま^一のち^一のち^一のち^一

この所のよりなりとすし
一とばいしとて

よりのいは打言切るる具は公あひはねお心

くまをくみりけり あまのくみりけり

とちりくくつづきおひか

初めのうらまをてまね

おやういそまふく おやういそまふく

あかりいさりいさるはねわつひんいそまふく

おろくーとく

月あしつそ行たるん 合ふ也

あかりいそ くまをくみりけり

おろくおの権えぬ おろくおの権えぬ

やう上元天師のね やう上元天師のね

くまをくみり くまをくみり

丁丑年の月替り 丁丑年の月替り

わきひ わきひ

とちりく とちりく

おろく おろく

ま ま

おろく おろく

源 源

は は

あ あ

とちりく

おろく おろく

初音のうらま 初音のうらま

中宮より一花は浦より出たりと云ふ

武師ノ女 武蔵ノ人 四ノ武師ヲ武蔵ノ人任

下ノ事ヤルニ一若一人之武師通スルノ事ナリ

親王ノ師ニ任スル時武師ノ職ヲ行フ武師

ト云フ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

且歌ノ事ナリノ事ナリト云フ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

武蔵ノ人 一若一人之武師通スルノ事ナリ

ゆくゆくはさるるにうたりけり

おかしき世の今にわひのうらわし

一こしし思ふはつらつとく

大ま 皇太后まうりくし

まふしえ胎 一し女給哈泉にけり

料とさうりく 一幼ねと左若人長くは依せ謝た

左ノ外 内大臣ノ官とく

りノ行も 坊政まふ 一幼志仁は良房坊政例

字上ノ年終りく 不おき

ゆりくし 一まのせし ねんくく又坊政し例

ふゆりくし 一く 御梅のしとし 相本ノ昇進

一しおのしりくし

おたのしきあけさる 大因とたはのし

一しおたはのし 一幼幼とらけし通用

おたのしきあけさる 一幼とらけし通用

一しおたはのし 一幼幼とらけし通用

一しおたはのし

一しおたはのし 一幼幼とらけし通用

一しおたはのし

一しおたはのし

一しおたはのし

一しおたはのし

一しおたはのし

一しおたはのし

中あやとりハ大政大臣
とまリ夕暮大政大臣
最上ノ中ノ心モシロトモ

宣ふ所也と云 見るしりり

とらめとあらんしきうとら 此の意は行舟は
世ひまをたれとけりしりり 心ゆくともとの

西にたりしりし夜を切しきた也

あやとりと云ふと云ふと云ふと 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと 又のあやとり

いふと云ふと云ふと云ふと

とくまふれのゆく ころけの約する

あやとりと云ふと云ふと云ふと

いふといふと云ふと云ふと 心ゆく
あやとりと云ふと云ふと云ふと

あやとりと云ふと云ふと云ふと

とくまふれのゆく ころけの約する 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと

あやとりと云ふと云ふと云ふと 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと

あやとりと云ふと云ふと云ふと 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと

あやとりと云ふと云ふと云ふと 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと 源河

あやとりと云ふと云ふと云ふと

せんやういふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

千の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

多勢の御所へいふこと 皇居の御所へいふこと

河原の...の沙例...
八巻

成説忠仁...
沙原...
...

一...
...

又...
...

...

...

...

七瀬...
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

たのぞりしよしとて ありけりしとてそのよしとて
いはゆるのふもしとていふとていふとていふとて
やももとりしとていふとていふとていふとていふとて
とていふとて

ありけりしとていふとて せむしの御
すもやましとていふとていふとて 不白の事いふ

心持勝しとていふとて
はるるもまれいふ浦のれいしとていふとていふとていふとて
とまれとていふとていふとていふとていふとていふとて

かましくりりて せむしの御いふとていふとていふとて
ひらきとていふとていふとていふとていふとていふとて
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

モシケとていふとて世間いふとていふとていふとていふとて
ありけりしとていふとていふとていふとていふとていふとて
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
新しめとていふとていふとていふとていふとていふとて
つらやとて

古伝たふとていふとていふとていふとていふとていふとて
たふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
わたりとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
とていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
源の御いふとていふとていふとていふとていふとていふとて
丁の御いふとていふとていふとていふとていふとていふとて
丁の東むらとていふとていふとていふとていふとていふとて
世志

たききりしんん

源のりし

るのりしんん

るのりしんん

とりのりしんん

は(る)るのりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

うしゆ

うしゆ

うしゆ

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

たききりしんん

大蔵寺のしんん 源のうし

このつらきをこ へりてはなほのさかぬと

こころのまじり 生蓮の血味をのりし

ふたつを思ふのまじり 白くまじりて

はなはたのまじり 生蓮の血味をのりし

ふたつを思ふのまじり 白くまじりて

はなはたのまじり 生蓮の血味をのりし

こころのまじり 生蓮の血味をのりし

ふたつを思ふのまじり 白くまじりて

はなはたのまじり 生蓮の血味をのりし

こころのまじり 生蓮の血味をのりし

生蓮 春巻の御屏一巻あり

寒の枝ノ葉ハ源氏七七歳ノ一編 其のつらきをこ

Handwritten notes on a slip of paper at the top of the page.

江戸中

おとこ 賊の首領にうたふとまのひかり

日しつかりてふりまゝし 男の首領の女のひかり

アラスカと千の言にまじりしつこくは竹でし

うりり 首領のしかるこゝろ 大物候せし

今の世にのすろはむらじ 同くちりまのし

大物候し 一部合は 江戸とてらこちり

くみちりり 諸候 江戸にぬれし

江戸のふのこ 江戸のうらみ

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

女中のふりておしりこん 是れはかきりまの行

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

くみちりり 江戸にぬれし 大物候の

かきり 是れは同じ せすま揃道にたすとも

うぐふ うぐふとて

何れかをしげしき申しゆが世をたて へまよふべきこと
ふみうらうら 申すことまゝの心也

わらわらふのさきし 月さりの申すてしりやい
佛のいかにしつこくさるるを 如是く難度なり

うのうとすいそわらうら 芳の心
わらわらうらうらうらうらうらうら 只ま揃ノカノ

うら果敢てんわらうらうらと歌い多々也
二はせんまじりの世ハ梅 三はうらうら冬ニアリス

ハ梅くも 田舎すつこす月うらりのもの
年ひつこくつひも とうらうらうら也
うらうらうらうらうらうら ま揃にむらうらうら

カウシトハ侍はらふもメタ也

大將れ方し 大將とサリはけまよふ女あつひつかり

まらまのあまうらひし 女とあつひつかり
まらまのあまうらひし 女とあつひつかり

あつひつかり かつひつかり
あつひつかり かつひつかり

あつひつかり かつひつかり
あつひつかり かつひつかり

あつひつかり かつひつかり
あつひつかり かつひつかり

あつひつかり かつひつかり
あつひつかり かつひつかり

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

は町のササもきや

風しつせんきしりふ 川をさしあ

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

梅のつらりりく 梅の折しきりしはははは

こゝろはははははのしあせはははは

おのれさうぢし有の言かりてり氣いさふら

見る三秋殊子の男にカウラウ中州の物産を
 丁三ツにせしむるも母のよしとて未だ
 畢一竟とせしむる今一ツにせしむる丁三ツ
 陽自うくこころのわらわらとせしむる
 花物め家の内りしころのわらわらとせしむる
 妻のゆねはとも自ツにせしむるわらわらと
 まりのほね 實系系 未だはね
 二条にせしむる未だはね
 四つにせしむる未だはね 未だはね
 しつゝのわらわらとせしむるわらわらと
 くのえま痛くせしむるわらわらと
 やの身やりのしつゝのわらわらと

終りに

ささるわらわらとせしむるわらわらと
 之部へのわらわらとせしむるわらわらと
 今とせしむるわらわらと

開也 春名以詞為名

笑やうかたれ言たしハトモとせしむる
 丁三ツにせしむるわらわらと
 は春名以詞為名ハ八歳ノ九月也私但ウツ也
 卯月氏三ツにせしむるわらわらと

ふのしげとみへはあはれなるにきき

源氏三球多しおの年常徳成りてなりと

はなまのたかひとみへは （いんまやとつうりやうこら

みまのつたふたやうのりやう）これかみちりてとせせせ

りたあはれに両首トミに東にノキナリ

あしよりたかくの年とみせのひらひのりけ

一は四千年二千二年のまに海軍のまに下

おの三年一にりてりてのりてのりてのり

しふの年まにのりて

車とみちりて 牛のつらてりて

新まのゆき 伊勢のまに下

りてりて かたき

あつたあはれの 将禰ハ又い

又織りてりて

りてりて まにりてりて

ナリに和ゆの まにりてりて

わとせわの まにりてりて

はなまの まにりてりて

地侍 まにりてりて

の まにりてりて

道 まにりてりて

一日 まにりてりて

わ まにりてりて

一 まにりてりて

せりーたまきり せりーのり 小島海女伝書

あしうとせりーのり

あしうとせりーのり 馬やうせりーのり

あしうとせりーのり せりーのり

あしうとせりーのり

あしうとせりーのり 和文言ふわりのり

あしうとせりーのり

諸言 春名中

雲の深成世成りてしうのり 雲のりてしうのり

雲のりてしうのり 雲のりてしうのり

雲のりてしうのり 雲のりてしうのり

せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり

せりーのり

せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり せりーのり

せりーのり

とこらーのころの ちかきうらゐのころのすもも有感
しりしりのころの ちかきうらゐのころのすもも有感
一助言 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと
に

引りしー 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

京とてふところの 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

はげしんところの 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

よこねのころの 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと
大言ニてはきあしとくニおほくつらと

くらたのころ 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと
りはるる

了しよぬ 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

みまろのころ 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

つらぬのころ 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

わかんなくて 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

つらぬのころ 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

死にかかりての 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

死にかかりての 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

死にかかりての 殊美ノ類ニナシ江守ナキあるナシといふこと

法多りあり 深ふ

内はまこといりけり 深ふハミラウのりる冬ノ吹ノ年ハ

何と三年ハナレハ内ハ十三ノアリテラウツ

三ツハ但シ井テハ年ノハ治セヨクヤ

少きヨラウチ 世々もウツテラウツハ一ナリ

何ヨリテラウツハ一ナリ

下りる事ナレ 桑深ニテハ何レノ事ナレハ

らま女房 二ノ事ナレ

何レノ事ナレ 世々ハ一ニテラウツハ一ナリ

何レノ事ナレ

牛ノ事ナレハ 病ノ事ナレハ何レノ事ナレハ

常ノ事ナレハ

こまき事 秋紅ニテナレ

これハ人ノ事ナレ 姑好

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 牛ノ事ナレハ何レノ事ナレハ

何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

何レノ事ナレ 何レノ事ナレ

ちんちんしりりり 梅
さしん ころはらりりり

月あふふ 三月の梅 一部は年々行中

梅のあふふ

あふふしりりりりり 梅のあふふ

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふしりりりりり

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

あふふのあふふ

き行末 非代のめられむののり

るそくしうらうの非せしり

先とほねるん

左宮の御衣の作り

のまじりたるんを右宮より作りしにまへ

タムマ

りそくのり

白雲よりけりまのまつ

ありし

ありのり 右宮より作りしにまへは所見ゆ流

ありのりや作の元人なれりしり

ありのりよとよとて改の蓬葉の玉枝又の太風

又の燕の葉の中たるにやス貝の公死て本

ありのりよとよとて改の蓬葉の玉枝又の太風

金銀のつらふおたりしにやはり得たり姫にまへ
ル火入りの心は即焼ケリゆ曲ナカリキ事

いしりらりしにまへ

くまのりよの 是天くまの 然然人の蓬葉

難列のりしにやちりしにや行り守りまへ

ニテ玉の枝の造るに姫にまへる時を造るに

来り福の末下ラ責ケルにニテ偽アラうにテ無曲ナリ

キ是天くまの 給ラりしにまへ其時を

三つとすにまへにまへるに玉の枝に有る

にまへるに 金銀の子

和歌除月成文抄 讃法寺の位下臣勢カ部

相見 師島泰二 除月執筆 時事 時事

このまはに三々 張はれ也
カラノキ唐ノウスモノ也

ハ一ハハ ナニ三才ノ時ヲ唐使ニテ波斯國到リ

胡兜ヲ唐使行ノ者ニ 所修羅琴ヲ造ラテメハ

シヨアリ 河ニテ波斯國到リニ梅檀木下ニ

琴ヲリテアツクハ到リ又是クナラニ時ナラニ

者トテ也天地ノ事也

クハナリト云 右ノ方ノ右ニホスナリ

子アリ 道凡 延衣朱羅村代ハノ心 星瓦カハ

屏凡トモハシメウチ常ノリノトヤチラ道凡コソ

ニキシカメハカメシ

天ニハ其トナリナレ

右様也

伊勢物語

左ナリ

正三位

右ナリ 又右ニサレキマナリ

平内侍

左ナリ

重ノ上ニ

正三位ノ位ニアルナリ

各侍大臣

又正三位ノ中ノ人ナリ

在立中侍

為ケノ位ニ定メナリ

一巻ニ

鉄ノ書所引トアラフクシ也

正三位ヨリ正六位ノ書ノ事ニテ又正三位ハ内ノ人

之ノ事アリトナリト云 内ト云トナリ

初ニ終合ハ終文ト内ト云ナリ

侍人ナリ 且之の侍人ナリト云 延衣朱羅村代ハノ心 天徳寺ナリ

様也

すくろり力 大連ノ慈ラモアウラシシ路シムアムツシ
泣し 朱唇也 又秋好コウホシヤチヲヌムク
梅ノホ 仕好也

年ノのりまふアツシム 年中ヲ言フシム
之ノまの 相意シム
えりりり 之ノま也
ふくくく 非シクシキ
ヨウキク 朱唇也

ひのの街のくく状 勢の果必サヤクナリ
幻ノ細合ウツシム
朱唇尼ヤシシ
ぬくしこせり 一節

非代のり 下
之のり 年
泣乃湯也 朱唇ノ砂維
内為皆美し
維のり也 賦月夜

ひりり有し 左梅ツホ 右ム
女唇のまふらひし 志堅
わハハ人 時
巧つろし 梅
丹ハハ人 女

赤きノウハキニ栲童子ノヤサニ紅菖蒲ノハハ若施
アコハハニモニモアサスルゆハ夜アサ子ハ面ウスハ
裏崩スララナリ

ワラバツクノ柳のころも即梅さしこのあころるり
アラ也ガリウスハニクハニクハニクハニクハニクハ
トアリアウニナラハコチモヨキニモノニシラニル
柳ラモラ白ク裏アラキクマクハハガ花トモ
穴多しのゆとち 花れいとうら葉葉ナナラ
花と穴とら面ナラウス知れラハくは穴とら
ナラ 子ラ 一右
一節

呻ま
ろき如

呻ま 号まじ 判キヤ

かこゑのうきりゆりて 昔ハ緒しぬふらうも也
今ハ心取とけりナリ 二見と

ゆされ井末ゆり

ゆりて 源ノ詞也

夫ナラ 左方ニ妻ノうりて之ニ反ナラナリトナスニ

ノ術ナリ

注のこまらる 柳菴意帝ノ

今のゆりともいふも 秋田カ不辛ノコト也

ユスツの 世を改修ノリハ能くヤハク也

吏才ラハ 保才子未比暖誠保氏信々云云

行のまじ 呻ま

妾のよの中し たら妻のつらくまのいあて

大なり也

とくさうとくさうめさうく

まらあさうつういさうら詞し一部

サハハサリ 功給金二十月也

之のうらさ さい丹ノ官に和琴うらアツカレト

む和琴うらツカレトノ未器ノノヲタシヤニ不見 一部

榊御言サハハト 海成しはう也

まらんあそ

又さうく 列ノ紙ラタニハリタマヒ

中あしふらる ことて言しとる人多しト定タリ

世に又中あしとるトサハハ

ふのほらいしとらり ことさうくの

あつさやりの 実さうしとるトそえ又世の

いりりしとる

とく 海成しはう也

あつさやりの 今に年とのとるトそえ

サハハサリ

四葉のうらさう 暖城沙素トセ和風をいひま

いりりしとる

丁あつさやりの 夕暮にサ年とのとるトそえ

杉

冬居三年刻ウモリ年ノス

は冬ニ源世歳ノシ給合冬モ同年ノ事ノヲ在

東の匠つりてそそ 二善院東院達生冬ノり修

ゆりてそそ

もそそれむらり中務家 御名居のむらり中務家

是前中王蓋の親ニキリ小倉文也ニ此ノナリ

氏部上捕の者ノリ 西ノ木捕任行 二男

ゆりてそそ 御名居のむらり中務家

ゆりてそそ 御名居のむらり中務家

ゆりてそそ 御名居のむらり中務家

ゆりてそそ 御名居のむらり中務家

ゆりてそそ 御名居のむらり中務家

戦勝の命と云ふも 泉教を不承のよきなりと云ふ

と云ふ言ひしは年長も同なりし事
入江と云ふと上つてスス列に付しなり今又
四角と云ふ事なれんからし入江と云ふ事
うしろや
と云ふ事なり
四角と云ふ事
言集十六卷

と云ふ言ひしは年長も同なりし事
入江と云ふと上つてスス列に付しなり今又
四角と云ふ事なれんからし入江と云ふ事
うしろや
と云ふ事なり
四角と云ふ事
言集十六卷

三三歳に及ぶと云ふ事なり
此の言ひしは年長も同なりし事

入江と云ふと上つてスス列に付しなり今又
四角と云ふ事なれんからし入江と云ふ事
うしろや
と云ふ事なり
四角と云ふ事
言集十六卷

桂宮ノ事なり
此の言ひしは年長も同なりし事

桂宮ノ事なり
此の言ひしは年長も同なりし事

つくしやと也我思す事しも下の法乎明をミテノは匠の思に我
 事ありト云ふ事女房のめカシニモラトラスナト思ふん言ヒラセ
 又ニアアセテ我思シラシトモ思ふカシノヤ法乎明此法乎明
 詞也思ふ思事アハ法乎明ニモラトラスナト思ふん言ヒラセ
 此法乎明は下の法乎明ニモラトラスナト思ふん言ヒラセ
 是ハ法乎明ノ射
 中軍と云ふし 此中ね 兵部侍郎也
 此中ね一ノアリ 兵部侍郎也 兵部侍郎ニ付也
 此中ね一ノアリ 兵部侍郎也 兵部侍郎ニ付也
 解申シク此中ね一ノアリ 兵部侍郎也 兵部侍郎ニ付也
 此中ね一ノアリ 兵部侍郎也 兵部侍郎ニ付也
 此中ね一ノアリ 兵部侍郎也 兵部侍郎ニ付也

月の下を河のまきり くらぬみ林のまきり
 ケヤリハノトア月をスミナラ面向して下へさるらひ也
 久々のえ、 次朝んふ
 行々マナリキマシクハツキ 昔も朝夕ニマナリキマシクハツキ
 アルハ行々マナリキマシクハツキ 昔も朝夕ニマナリキマシクハツキ
 申上セシヨリ 川音
 ろりこまあり 川音はわりん
 ちりきんあはたかり 月影のりきんあはたかり
 石まきりすきしと云ひ 川音はわりん 或は左を并り
 雲のまきりすきしと云ひ 川音はわりん 或は左を并り
 あら若く有と 草やまきり
 まきりすきの若く有と 草やまきり 或は左を并り

トモの書を今も今も東遊道にせむやうに神ス
ひのころよりひし 明石ノ水東三歳に
いふけりけりやうにひしはまゝにせん
ひまゆひ多かりし

且つこのころより 志願の海成のりきり
且つまたこのころより 我天のりきり
はるかにせんをすりよせんし下れり也

うとせき 春居方しんきりス

はるかに海成世成ノ冬より次年ノ休みのりきり
つとむりけりやうにせんし 痛くせんりし
いふけりやうにせんし 春居方しんきりス

くそのころよりせんし 申ましむるは
けりきりやうにせんし 一節之味成時有る恒成之別又如也

はるかに九歳を禱す 志願の海成のりきり
はるかにせんしと申わたりしは

はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり
はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり
はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり

はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり
はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり
はるかにせんしと申わたりしは 志願の海成のりきり

らるゝの流りも 千と田のモカクモトの流り

アカズ

わすさの流りも ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

あつたそつそつと ありけり乃髪に

此の世に明石入道ノ血に引かざりしは自に明石ノ人
に下トハサレモ思ヒキリトスル人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

其の世に明石ノ人ナラシメ入道ノ故ニキ
カクテハシラシクナケルハ

娶毎日不詳

即位入實入八臣下通人命主之史記

一世源氏初之長子成て存し 孝仁天皇 天皇御宇 宇多御代

右大臣臣成てつて宅内事とてこれに未任也

侍りてわきしとて 仁徳天皇御代

権中納言大納言と成て 孝仁天皇

舍師と成てけりて 仁徳天皇

よの中を侍りてさきしつてくつて下向為て自壽

く徳と成て 孝仁天皇御代と成てけりて

けりけり河内

もしし時を安と成てけりて 河内川号は川号なり

けりけりもし時を安と成てけりて

さきかたはと成てけりて

今もこの時なり 為るなりなり

いふなりけりなり 千三三門なりなり

え海女なりなり 無常なりなり

年のなりゆきなりなり 孝仁天皇御代

りなりなりなりなりなりなり

晋石孝信房人金吾言れ満林

なりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなり

なりなりなりなりなりなりなり

君もさき義経の在

松原の夕に折ひてあむらふれし一あまの 昔より海島

を約に共らうけりてあむらふれし一思ふ海島の

下の思ふの思ふ

ほろろとて つらうのたうとてつらうとてつらうとて

あつとせん

いふはつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

海島の方を結ぶと思ふもつとせんあつとせんあつとせん

と思ふもつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

つとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

たはあつとせんあつとせん 海島の年をけりてあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

あつとせんあつとせんあつとせんあつとせん

東洋の年をけりてあつとせん

源氏物語の巻目

推 文明七初下旬信長無後継と申相サシテ

春底の夕暮に信長源氏共日月より各々去りて

信長はつれなきに 横前には又桃園ありて

長月夜に 吾はつれなきに 今も信長は

信長はつれなきに 桃園ありて 今も信長は

信長はつれなきに 桃園ありて 今も信長は

信長はつれなきに 桃園ありて 今も信長は

信長はつれなきに 桃園ありて 今も信長は

源氏物語

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

源氏物語の巻目

ふらふらとくもさ 源氏の内より年々くもあや

まくのせも とうせうらうらとつらにわかれやうせと

舟はる白ミちつかり

あまふり かくしのついで

まゝの風 中島内 大島海 周作の月と階

ころもみちの 海島階 意のゆたうわいのふと

あまふらむさしつつかもとくうらつるはつとせと

くまやたて

ふらふらやうせふまをくしすもくやうらりて

くらのねちつらつてんやうこるあつらつらうりつ下

すももくすてけいあかひんうらつてんくもせと

ふんせしるふらつら

様とつらてうらえぬ 九月廿日

けちつらりー 下海島まりのふらつて

千つらりのふら 意のゆらりのくやえり

あつらえ海島つららのつらりとあつらりつら

あまのふら月のあつらりつらとあつらつてんくも

但たの海島つら海島進もうらつてんくもつらつてんくも

あつらりーくもくも 感のふらつてんくもつらつてんくも

つらつてんくも

ふらつてんくもつらつてんくも 双海作名ノ宛也

あつらつてんくもつらつてんくも 舟はる海島つらつてんくも

たしそつてんくもつらつてんくも

シテ一の巻 二葉に東射し

内ノナリ 更しナリナリ

ナリナリ 牛車ナリナリ

ナリナリ 雲ノ影ナリナリ 又ナリナリ

ナリナリ 人の心ナリナリ

ナリナリ

ナリナリ 為ナリナリ

ナリナリ 様ノ心ナリナリ

ナリナリ 川ノ心ナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 一帯ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

ナリナリ 深ナリナリ

以てしるを いふむらふ 一部内侍ノ年ノ

ヨリタテラテテク約シタリト云々 今ノ上ノ下ノ
今ノ上ノ下ノ 今ノ上ノ下ノ
今ノ上ノ下ノ 今ノ上ノ下ノ

成程 成程 成程
今ノ上ノ下ノ 今ノ上ノ下ノ
今ノ上ノ下ノ 今ノ上ノ下ノ
今ノ上ノ下ノ 今ノ上ノ下ノ

そのゆゑ そのゆゑ

幸あれとの 幸あれとの

川 川

今 今

今 今

今 今

今 今

今 今

高しゆかきしや

松平の御用金に
おとし又ササ子タミナクは定むくうラクニルニササ子タミナクは
別らりしきを ねんしや 心持のこころをも定む

こころは源氏ゆきし

中一の御用金に 心持のこころは源氏ゆきし

こころは源氏ゆきし 源氏ゆきし

今よりしや 田舎と云ふやうの事なり

高き心持のこころ

一助合比之所は 勢のついで

けりしや 心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころ

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころ

高き心持のこころは源氏ゆきし

高き心持のこころ

高き心持のこころは源氏ゆきし

お新伝 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ
桂の木の へをけられし 杉のノコ
大松

三ノノの目ハアツシ 新伝は御位ノ多クもあつて
そこの へをけられし 杉のノコ

けりまの 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

新伝より 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

ひあつての 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

すくすく 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

新伝より 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ
念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

有るまじり 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

う切しつて 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

こころしたつて 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

この御位

あつての 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

さうさう 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

六つ

念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

けえん 念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ
念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ
念の御位 三ノノトウモシカもあつてふつていふ

のあかし

右左の 二条抄改是し 世人

ゆりあしん 伊の平りあしん

アサキミヤ 二條院の池うアサキトミ也

阿比多きりた 長壽殿とく人の冠と又右と

アヒニシテト

よいつとまきり 昇をこく人 逐行か

取のりあし

文也(久) 久(久) 久(久)

ろろろろろろ 忌親、賢子ノサラヌトシ 況んや

也(久)

やまのりしり 日華ノさるかトト

せりりり 藤原トクノ文子ノ通ニ

今ラニ度ニテハ早トノ詞

又右左の 左の昔ハ之将ノ身也

シノの信ん 二条院ノ東ノ多クセ

二條院ノ内ニ流ルル東ノ院

東ノ院ト云ハ東ノ多クト

家ヨリ外シリ

カタチシキ

右左の 氏名ニ云ハ祖未見

アサキ

アサキ

アサキ

生補入以の科ニ入る者素ニシテ心ニコトハ及カシク文章
得業主ト同ク又カ 又字素ニシテ心ニコトハ及カシク文章
ク向ニ及ルハ文章得業主トシテ又昔ハ諸國ヨリヤ
今ノ年貢奉ルルアリクシテハ貢士トモ進士トモイフモ
ク又字素ニシテ試ニ及カセルハ擬文ニ年主トモ同ク
ノカハリタレセ

一 可ア有ニテ課試ラトク之詩賦ヲ作ルハ以テ業ノ是ラカク
業ノ文トハカヤクノキニカ賦トハ序ナトヤクノ如ク業
トハ短母ナトヤクノ如ク業ノ文トハ儒業ノ一ス
タシタトハ向者ノ儒士有テ題ラ出テ其以テ對句
カヤク不定ラタラシク賦業ノ一ニ又對句ガヤク
此タリ門テマタフルルル業ノ文ハ相文粹ノカミ

ノ志ニアリクシラ極人育ヘシ儒業コトクシノ時ハユウトヨク
を原ニテラサニ為ルルコトモミテモ凡シカラス

一 秀才進士ノ科アリ秀才ヲカ方略ハ七篇ノ文又トモ
方略トモイハレハ不度ラカ 秀才トモハヤクノ文生
得業主ニ成ルル人ニ向テカ方略ノ二子ハ無端ノ文又
ト教セヤクノモヤク大ニトモ進士トモ擬文ニ年主成
タレシ

一 獻策ノ時トモニコトハヤクノモヤク大ニトモ進士トモ
獻策トモイハレヤクノモヤク
ノ向ニサタラシク又文粹ニ出ルルルハ或ハ神祠ノ獻言
詰運命ハ水ヲ亦カヤクノモヤクノモヤクノモヤク不
當スルルルハ時ニシタヤクノモヤクノモヤクノモヤク

一進士ノハ時務策トシテ如何

昔ハ時務策トシテ尚時ノ政道ヲトシテシラフカニシテ

カヤクサトハルハシラフ又ニヤキテコトフ也或ハ又方

略ノ旨ニシテカウクフテ獻策ノ又ニヤクシテモアル也

一方略ノ旨ニシテカウクフテ或ハ有ニテ保試セラル也

方略ノ旨ニシテ進士ノ方略ヲカウクフテ

一進士ハ時務策ヲトシテ方略ノ旨ニシテカウクフテ

方略ノ試ニシテ如何トシテカウクフテ

一文章生ノ方略ヲ家ヲ獻策スルハ尚書ノ時

ト又外回ノ楊^ステリシハ時ト散位ノ時トシカウクフテ

京官ニ任メ候ハ不就策ナラシメ尚書ノハ文章生

生ノ尚書ニ任メ清國ノ楊^ス文章生ニ任メ在國ノ

楊^ステリテハ二紀四ヶ年トシテ五年スレバ前官ニ任メラルハ

散位トシテハ同ノ獻策ヲハスルナラシメテモ京官ニ任

セテハ獻策ノノシラシキセリシハ亦成業ノノトシ

クナリテ又得ハコトフナクナリ

一或ハ文章生ニテ得業生ニ任メ保試ノ例ニテアリ

文章生ト得業トノ夫ハ如何ナキニ擬文章生ト

ノ文章生ニ成テ或ハ又文章生得業生ニテアル有ニハ

稀ナリ

夫ニテアリ 三人不見テ祖

ツミルヒシラス 不審ノハ瓜^ニヒシラ付ハヨリヨリナシ

ヨリノコトスナリ

若クハナラナレバ 二冬ニシテ人ハ汝ナトシテハ

この世に読むは是ノ事ヲ可哀ニシテ不測セシキ事
ハトテトクチカケリトテニシテ

又人々所
ハ微殿
擬文書ナリトモ一助

兵アトキニシテニシテ
ニシテニシテニシテ
ニシテニシテニシテ

梅葉花ニシテ
秋中まじ

海島ニシテ
海島ニシテ

梅葉花ニシテ
秋中まじ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

ゆきこを女ノ事ナリ
ゆきこを女ノ事ナリ

夕香子文メハ云フハ知テテモクモクシラ身ノシラシラ
アトシハ好モハ向道ノワズルハトシハシラシラハハシ
ノ物 云ハトシハ

カハカハカハ 一月ニシテカハカハカハカハカハカハカハカハ
カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

カハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ

ふつ文奴らん 一劫もハ文奴らん但源シカリナリ
うらむヨシナリ

中まヨリモワラハトワズシラナト 源氏ノ多クニシテ
ノカラフクナシラニシテセリルコト

梅桑丈柳ノ大ニテ 大柳ノ先祖ノ見

ヤナリノ母今ハハハ言シ大志ヲ信ハハ仕方ノ人ニテ

源氏ノ人ニシテラズルニシテ一様大ヤナリナリ

竹田ん

くひしといふ

わらしをとも 三思主林ニテニシテス

まへりしよりいふ人ニシテ源氏ノ人

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

多中ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ 一様源氏ノ人

中ナリ 巨ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

源氏ノ人ニシテ源氏ノ人ニシテ

久しき事なり流るるを流しし事井のく言つたり
是ハ又露ノ五音ノ方ノく事ト云ハク事ナリ
く事ト云フコト 凡テ言フ事
まゝといふ事ト云フ 又音ノ祖母ト云フ
けり事 一しき事ト云フ

東の院も老の事ト云フ 花女も言はれし事ナリ
はさりし事ト云フ 一しき事ト云フ

源氏も大政ト云フ 一しき事ト云フ
ニモアラサレ故ナリ

く事ト云フ 一しき事ト云フ 是レハ公事
思月 一しき事ト云フ
一しき事ト云フ

又又臆病也

今言わん事多し 楊子もいふ事多し 一しき事ト云フ

一節も多し 物も多し 一しき事ト云フ

多し事多し 一しき事ト云フ

わし事多し 一しき事ト云フ

又人ノ信者也 一しき事ト云フ

又言わん事多し 一しき事ト云フ

一しき事ト云フ

今言わん事多し 一しき事ト云フ

今言わん事多し 一しき事ト云フ

一しき事ト云フ

今言わん事多し 一しき事ト云フ

昔ノ者ハ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ
サレトクハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ
又ニハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

カハルニヤクニ作ル科

シモカ年ヨリユラニヤクニツケ侍ル
ニ多クハハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ニ多クハハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

式ノマアケシ年ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

賀儀先規石同トナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ハナリニ 中絶ハバハ代音ニ及又ツセラアワ

ラモレヨキヲモけうしぬのこ

りたりいろくー
おまのねんりいろくま
てまのねのねま
ゆさうまはまなれとよさり

良辰ノラトノ例ヒラ青馬ウリ

長代ミノ例ラモキニシム
アキリ良辰房チノ時ノ
とラシアミナラセるこ
ハトコノラサケノ一劫

アラ馬ラ白馬トモ
アラキシヨキトモテ銀

ゆい青ソソク設と十日ノ
人合ラノ青馬ノ
トモリハ舞ノ文モ
ホリト一劫

おのり 春希の芳キ
しは冬源氏廿五

ワチのりする おのり 一カ条

モウラのしる者 サカミナリヲ夕
景ノモト

うらあーん 舟ノ人
物列ノモ

舟ノ人
うらあーん

はま青サカミナリノ
シケ海花ら枕サカミ
アキ
サカミナリノ
サカミナリノ
サカミナリノ
サカミナリノ
サカミナリノ
サカミナリノ
サカミナリノ

おのり
おのり
おのり

引寄ラス(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ
五種トヨメリ若キヨリト不分明

は其のトクワリシ 武元五年(西暦)オニテ下向

あつて

ヨリ身の考ラハ 臣ノ志アリカソシ

中ノこのころ といひの字の先トモシ

このアハあつてなると 武元五年(西暦)ハ皇種トナリ

大史ノ監 大史監ナルモノノ叙爵シマス(過)ヨリ

あつてこのころイモのクメモ 日多(西暦)中(西暦)ヨリ

武元(西暦)年(西暦)イモイモ 武元(西暦)年(西暦)ヨリ

武下(西暦)シ 武元(西暦)年(西暦)ヨリ

年(西暦)イモイモ 武元(西暦)年(西暦)ヨリ

ト念ツルニ(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

監カ思ヒあつてモ正テヨリハナシ思ケルニ(部同)イ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

いし(種トハ)白皇種トナリ(部同)皇種トナリ

行はるも身なぬ　おろくのそは身のうてくもくへんを
むらりりそえ

くわたり　物のも　まろのそら　一部をうまをまろ

川なり　物なり

胡地なりしハ　在河海　桓桓政胡と時漢人止胡回
不得帰し　漢軍敗し故に桓桓又桓桓政胡と時

欲帰漢也　以時并胡妻子勿復　不入被刺
闕し平歌國ノ後人　切友國无便し意味叶ハ格論
新文集　博我人詞し

む補若崎　多きことハ懐月神也　孫補も在河海　多き

海に石らのくく又まをる

年と流つわらまをたふして　秋まおろくをくも

或うもりりりりふと

うはせなるくさのくさるひ　ハ懐ま立竹也今を

女師ハ只は竹のそをく五人ノ不怪ハ懐まがま

諸寺ニ女師ハてし

つて多　長谷寺の近所のまろしき

りかたりとく　か武か山官共アそま　まかり三人

家かりのほ竹　まのそらるのまろしき

くわたりりりり　おまをうまをくしりりり

おまをりりりりり　右近まろくのまろしき

世をり一劫を清くかくる奉りやうたれぬ夕やキ柳すんば

テ登こつてテリし

カフマリニキヌサトキテ カフマリテ 我れ多一劫

うりのひさしくもの はたけ 成みひさしくり アヤシ 又

一劫を 成みひさしくり アヤシ 又

これ多うりし アヤシ 夕顔の宿の

無者冬 はな 御ありキ 照宣ちノ内ニツリキ

よこいさうまや あつ の宿の

さるのゆり アヤシ 夕顔の宿の

だきり アヤシ 夕

ちさる アヤシ 夕

ちさる アヤシ 夕 おの 夕 おの 夕

堂の東向して左右ニツキテアリキ

弘ノ右ノ寺 長生寺 宿夫 長生寺 宿夫

フコノ又トハ不宿 長生寺 東向サ南

は園の 大和寺 南園 大和寺 南園

そこの 無常園 起世音 無常園 起世音

多の 起世音 多の 起世音

ま は 起世音 は 起世音

又 明 起世音 明 起世音

われ 双 起世音 双 起世音

そ つ 起世音 つ 起世音

宿 起世音 宿 起世音

夜 起世音 夜 起世音

おんまをりし 川原海舟のつとむつ後し初風川うし

し中せこえすかしエラヤト

さやうあすのハ ちかきしをりぬおをさうくのあは

さしひさり かなひらきしおしりて又あかり

こしにひりりり 二季にノヌウツリニシ

あひつこひしト 右進うらやまをりて帰しテさるり

ナはまぶらうのうらトまじり其証をすり

しちうはらんーく 筆のぬしにり海成をうらにた

こハアラス川うらにせんし吹の村うらにきせまうらツ

ララト右進うらりし知

女房ハサ七八 七七八オナリしこおアツラハ四オニシ飛をみ

タハサ武ほルケ年し十年のうらり海舟のまき海成のハサ三

おんまをりし けしあをりし

年あかりり 右を海成のうらひはとまのりりり

けしをマトケク一のけし

すりる ちう右進うらりしゆんをすんラカミけ

つげりりしとまじりし

さりましとて 筆上川海成のうらりりりり

さゆしやうしとけし右進ニタウしゆし

はまをり 筆上川ノけし

つらりまを くらふのさしけしとけしけし

ちうまをり ちうりけしとけし

さしけしけし 筆上川のすしとけしけし

とウ思ノうらとけし

右近の親しきゆり

うきうきとくくくくくくく

うきうきのまじりて高のたい

うきうきとくくくくくくく

源氏のまじりて高のたい

とていもは源氏のまじりて高のたい

又い我もすじりて高のたい

且つ又中サトニて高のたい

かくて中サトニて高のたい

とくくく

うきうきとくくく

福

中将ウキユエツク

ミキチヤウ 玉ウツクノラト

右近の親しきゆり

うきうきとくくく

所いといと 玉ウツクノラト

ノウノ約ニテ

右近の親しきゆり

右近の親しきゆり

とくくく

監からウツク

監からウツク

人といふ人といふ

ウツク

ウツク

とんり申さるるがごとし申さるるは
よし申さるるしつららるるいへん

身にて之とら既アヲクテ一助と云ふ^主人^後が事ナシ

ト云はレバモヤハモシテモ云ふらハバヤハカララハカニヤ
ト云はレバモヤハモシテモ云ふらハバヤハカララハカニヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

ト云はレバモヤハモシテモ云ふらハバヤハカララハカニヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ ^{ハカ}カ ^{モヤ}ヤ

いづのりそり

佐伯の考しつかりてきりしるを

年月の終り 誰人古くおん

在りて年下と受領人下と云ひて口を

とくしつてありき といふ等のさうして

うまのうららせむと云ふに似たり

サツヤキ 何れトヤリタルサキ

とせひきく くらりとしてりしるは

いふ支那ノ終り斗い今もつるさ

やそへんう 源三ツラナリし

路をきとつととりしりし

うららきやじき 唐ノ東京ト云

一説に地ノ海ノうらら

いふけ

いふいふと 丁あかりと云ふ

いふけと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

いふいふと 何れと云ふ

きして候るるを 髪を口つにさしつけり

くみりたるはやくやく ちやくとすまうしやくやく

ねぢりやく

きよきやくやく ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

くみりたるはやくやく ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

くみりたるはやくやく ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

ちやくとすまうしやくやく

胡蝶

ふかワラノ並ノ堅シ

公春源氏年廿六三月ヨリ及ニ

カ名書まのあてし 是ハシ女春源氏廿六才所ニ公春

廿六才トナリは約ラリ見ニシ女ノお家ナリは明年ノ

ヨリナレトニ年ヲはねおまきとてめ

おの旨ヨハ 子ねまらうとらうもナクナラヌハ

うへにゆめをうり思ふ也 和名三月廿六日余ナシハヨリ是日ナクナリ

ヨリ是日ナクナリハヨリ是日ナクナリ

らうにまひわたり 貴乃中交りまらうは尼ノ向ヨリ

とてやうくわたりぬみ思ふ也

わらまをくしり 中交りぬみ思ふ也

和名三月廿六日余ナシハヨリ是日ナクナリ

けり殿 乾うま

乾み うまにまはる月うたつてなしくまじり母系せらん

あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

コナタノワキナリ あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

おまのありり あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

風うけえ流ノ あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

あまき

あまき あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

けし波の敷く あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

わたつ あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

ノミサ あに紗巾着青ニ母ヲラントニ同おたまし玉にぬり

白鳥集年トナ

双調うきうき

うりうり 長春未 三々ひて長春未(カ)ノ声律

ノ長春未(カ)ノ声律 呂律公事(カ)ノ声律

中まのゆき 長春未(カ)ノ声律

サリトキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

ウリカキ 長春未(カ)ノ声律

行巻

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

長春未(カ)ノ声律

元^レク^レて^レよ^レク^レし 一^レク^レみ^レ子^レを^レ舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

向^レア^レリ^レ者^レノ^レ神^レの^レこ^レも^レお^レか^レれ

ひ^レ物^レ格 任^レ者^レ物^レ格^レし^レし^レ祝^レも^レし^レと^レぬ^レし^レり

し^レら^レう^レの^レも^レこ^レえ 海^レに^レの^レき^レの^レま^レの^レは^レら^レじ^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

そ^レら^レと^レ有^レこ^レし^レ思^レは^レし^レ也^レと^レら^レん^レと^レ思^レは^レし^レ也

ら^レせ^レな^レら^レし^レの 土^レ方^レ舟^レノ^レナ^レラ^レシ^レラ^レも^レあ^レら^レう^レう^レと^レ思^レは^レし^レ也

ま^レら^レん^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

し^レら^レう^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レし^レよ^レの^レ同^レに^レと^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

ほ^レら^レ 皇^レ並^レ源^レ公^レ世^レ々^レ友

ま^レを^レた^レぬ^レぬ^レら^レう^レの^レ身^レ之 舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

と^レあ^レる^レの^レほ^レら^レう 源^レ公^レ並^レの^レま^レの^レり^レぬ^レし^レり^レと^レ也

う^レも^レし^レり^レ也

お^レら^レひ^レの^レら^レり^レも^レみ 源^レ公^レの^レ身^レ也

ま^レを^レた^レぬ^レぬ^レら^レう^レの^レ身^レ之 舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

ま^レを^レた^レぬ^レぬ^レら^レう^レの^レ身^レ之 舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

ま^レを^レた^レぬ^レぬ^レら^レう^レの^レ身^レ之 舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

ま^レを^レた^レぬ^レぬ^レら^レう^レの^レ身^レ之 舟^レ月^レに^レ置^レけ^レば^レお^レす

らしくはるく 源氏ノ冬ナラヌラシクシラニ
向のゆくしけるも此れに 考ニ玉カツラノ
源氏ノウラ残を以て中交ナトモトナリ相成
る場ノラリニおれツ井ナニ 東沙音ノ如ノ對ニ馬カツ
井ルシホリニこの場ニ午カシ
つるまうとらりウリニ はやいニ外ニはれニ
キヨラノ考ぬナリ
多し之おる多し 又月ノ影ニヨリ
夕ニモリ也ウチ 月の影ニマカシ 夕アウラ
トカシハハ馬ト伝トウカケテ快トニ
めおれてもあつても 月の影のてりナリ
まろくもつらり 又快くもつらり

中將ノものつらものつらものつら 午カシハ馬ノ
二人ツツカシテウリウリト但ま動し一部
トカシハハ馬ト伝トウカケテ快トニ
めおれてもあつても 月の影のてりナリ
まろくもつらり 又快くもつらり
四ノ
うま ちのまをを来ふらア 考ニ玉カツラノ
ラ唐衣トナ人ノ世ニモ髪トノ内侍ナトニ考ニ一部
まろくもつらり 又快くもつらり
このまの 考ニ玉カツラノ
夕ニモリ也ウチ 月の影ニマカシ 夕アウラ
トカシハハ馬ト伝トウカケテ快トニ
めおれてもあつても 月の影のてりナリ
まろくもつらり 又快くもつらり

るるのむらやけとし 在る諸村の園の中が將に不村

と云ふまに三つハ羽林でうらうらと一節

赤城未らくとて 細曾利

ちりのきこ 行かざるさきと 強まうとて

机を改しうらとて所りしけけり

瓦敷の批判ノ外ノ人ハ善道ノ海島ノ海

を瓦ニハ海島ノ事非ラハ吾道ノ瓦敷ノ海

たはもやしけり とうまうしけり

其のこまし 呂南ラハる舎セス瓦敷ノ事

たはまねとくろの巻しうけし

ふんやうし 是等ふんやうしは折れし瓦敷ラうらうら

上ハ後ルワうらとてあやうしけり

と云ふちり中と源成のゆりとのうらたけ

わふらりあき ちのむのサ

ゆふたゆりさきとて 奈ラハ海島ニゆり

下まうの飛ま ちりけりてまうら

海ニ外飛馬のゆりてまうら

くまのうら ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

ちゆはニ母ノゆりて又ニ港にけり

今こそウレシクも 定由の地意ラウの行リ高ラ遊
今の事との所と 走らん事ハ何れも 朽色集概同
伊のてらウレシ

言便ノ教ニ宜ラウ且ニオキテ言主教
遊本セシヲをと物々言集活ラハ坊教通ノ志ホハ功
ハリトキメテリ何にほと 凡如東世ノホニハ凡聖一
心身並ニノ理ヲ既ラ生ノトヒラ速ニヒカサトシ
ホシマス心アシハ大慈ノキニリ是ニヒカサラ有ニキテ
ウレシキヤトらんとい故ニ因テ京報元王ノ王ヲ現シ佛
報身ノ事ヲ既ケモ三東唯心ノ法ナシハ信心モ
ウレシキスカタキルハこそ我教行ノ事也
言便トラシヤリテ 最初ニ大家ノ法ヲ既ケテ佛ノ
印ニセサシヤ時ヲタラサレ生ニ不おもはけラ既ヒ

林教お遊スル故ニニヤハ思惟ノ内既ヨリ度大家ウヤ
ワラキテ林教ラ既ヒテリキキテハ何舎一向ノホ家也
何モ方志ヲ而ヒモ賢ヲワリ衣ラシ喜ニラクルハ所
ヨクハシテシヨリニトハサモ有ニキテチラサアニリニ生
ノ初キトハ信心ヲキ故ニモウヤラシトウヤラノ言便
ラコラケル也

何れも心物ニシテハ心ヲシテハ心ノ心ハ心ノ心
此の心ニシテハ心ノ心ニシテハ心ノ心ニシテハ心ノ心
何舎既ノ言歸編モ法門ハ今如来ノ切ニチラヌ
可化ノ林根クヤシクテニトワト既行メ法由ノ宜ノ
コトカラウハシラスノ其心アシクマワガアシクワト思
但宜偏真ノ理ニ落ルテス故ニ佛又キララアラ

まう川乃年シガリ故ニ言ホマノ中ニ教ラナラテ
色ニ既言ニスモハ修布モホミウ侍リハ州昔ノ舟トリ
ニモウラス今ヲ舟トリウモ且ス此ノ元モ只ニ舟トシタレ
ワトノ書ノ先有室錯記ノ如葉流ラ三千ニフヒ
善吉物外トモ云ニ鉢ラナクモヨリテ原ノ恥
小藻大ノ材ハ世ニ因ニ越ノ或ハ列ニス。或ハ道ニ
カチ又三蔵ニトニニサシハ教並對教トモ又
障叶ノ教トモ云シ

ふりんやひのりしひりしりて 般若地法
河合ニ研室碑破ノ室理ニシツニ方等ニ有室
錯記セシウ今果モ見皆室トセラテホノ枝ヲエリ
ワシラ有室ニ合フサトリウアタハ此モラクモモラテ

ひのひのりしりて又ぬるりやうらうら方は
かたのちのりしりて 是花里ノ内院アウラテ

此ハ彦彦ニけくニ多ニ善シヤシヤラテ終ニ多知メナラシ
列はナシ天際月ノ赤リ月ヲタリ善モホニ口ノ紅雲ハ
かろくメモ非カチセハ埋マタ天如ノスノラウラ
四時ラユナシタレ道ニテシタカメラハカレノメナリ
化故ニヨクウハトニナシシモ莫トモシテ平ノ全年ハ
志更ナラストニエタレト提ト頓悟トノカメリナキウハ
龍女カ無怖世世ノ成道ニテサエナリ毒行ノ角ラ
スヲ辨ラカハタレモアラズ只其ニノ成道ニ性未
用會ノ時ハニシ頓悟其ヲニホニミラ生死涅槃ノ
二路ニタラ改メ方便モ更ラサレシ余方余改ラカタ

此今令は元同くもあつたはかか義を以て
 令今宗令なれトテラサルニ毒ニ身自持しハ三並
 口執川臥處身も五煩悩菩提不ましハ生死涅槃
 證又定れノ用落し是ことば是れを盡ノ二種ノ境
 終じつらくも真事ヲフミシハ五十年昔切
 乞に此久非ニアラス又ツシカ處ラツシカ更何ノ言
 便ラ廣メ始ラテ更ニトコラシク一代ノ法は也極
 大ニ只相持ノすれト申シテハ此ノ心
 平く心無きなりハ唯是ト 何の法もよ
 しくしてはつらうとさかりぬきと
 是うのころ分なラゆ法ノ他らも
 二まのゆきり 一節あるこそラシク

けしたる 袂にぬき 世ののり のもは川りもなり
 まよきものよし又源ノミアツヌ法ノ心と好ミアツヌ
 はんアツヌよしを多る又多かりとテノ心ノキニヨコヲ
 カシニツツツトケサハノ心ツツトキニヨコヲ
 ケツツト双紙河ノ源氏好き
 らひのありき 一世源氏ノ人 黒ニ有ナリ
 伊豆 アモクノノラシニミナシカスツナリ 田ノ里ノ心ニ
 アツリナリト云 ココヤシキツチカカシ
 らのあり 地ぬく心
 是れは心もあやうまうらぬか
 多かるをばなすあつた下の心ツツナリ

まじりてしるべきに しのぬらふこし一劫

花三下まきり家てしるぬらり私らサマヌラるる
アリウナラニリノニハルノマ

中将君ヲコナメニハ 夕暮ノ中将定ヒテヤラニハラマ
たふんときわ 立寄居ノ女房ノチカラニ

とみを 御しうしえぬ

市下りしわらこきり 内大臣様サシヒナトニラヌヤ

任君ゆほり 徒母をきし物にまへハラコトアキ

トウ又ニ世言メニサハトムウツキ中君ラ下ニチノ立
今又コトコトワカサニサアキニヤトアキナ
ナル名ノ娘ヲモシヤ

ゆきえ 聖並 渡氏世六友

あさ川 寄屋所

ひまの 柳多のやでるうら 和

とく之 千飯子よの影わアチあるまより

あさき 一さうりさゆ

整りとしすまきり 一うりくえにすゆ

柳一ゆらぬ 一不

はまの比とひあまより 多ククアきりうらまふニハマキ

とらりまは之にトツカサテマ

花えよあふ 解に偏シタレ

とらりまは 福言中 柳多のやでるうらまふニハマキ

かきりナル 一うらこきり

庭をよみておぼろし
うらり版書にせよ

うらりうらり

中将をよみておぼろし
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらりうらりうらりうらりうらりうらりうらり

は中将をよみておぼろし

初下やうのわらわら
海にやうのわらわら

うらりうらりうらりうらりうらりうらりうらり

うらりうらりうらり

うらりうらり
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらり

中将をよみておぼろし
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらりうらりうらりうらりうらりうらり

うらりうらりうらり

うらりうらりうらり

うらりうらり
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらりうらり

中将をよみておぼろし
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらりうらり

うらりうらりうらり

うらりうらりうらり

うらりうらり
内史長ノ中将をよみておぼろし

うらりうらりうらり

うらりうらり

うらりうらり
内史長ノ中将をよみておぼろし

ラララハヤニシキヲセテおまじり一部ノコトヲシテハ

そのまは けくろくノ事

せしめけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

行はしりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

しりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

きりしりけりしり

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

法馬堂行一節

中ト 中ト 中ト 中ト 中ト 中ト 中ト 中ト 中ト 中ト

大まじりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

くのはりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

中將のいしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

あつてのいしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

まじりしりけりしり

しりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

同

あつてのいしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

けりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

しりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

あつてのいしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

あつてのいしり

しりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしりけりしり

しりけりしり

アトニラホスロモ
アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

舞火 聖母原六年廿六

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

アトニラホスロモ

らりつばえ三人^{サシ} 年三并か将もまじ

凡の毛糸しぬね 此凡糸向の平間と吹切盤侍

中ららるる 和更うこ

弁めぬじやうーらりそ 乃すぬくとまきおとガノ

かぬとらひやーらりこ

丁とせし 乃其糸こくちららるるあしこくちらりこ

中ららぬしゆらるる ーららぬの中ぬこ

糸ららぬのつるてこ ちうらりしやらららにノコ

こかぬらりかこしたとまらこサハ糸更も其すはぬ也

のち更しけしアハト下すぬふ 糸のぬらうーららぬの糸

とらららーらららら

サコウクモラナシラ 乃中將こつらららら

解分 星並源公世ニテ

多々年 づらぬのらる

くろとららる ばららららららららららららららら

年とらりらるノオこりいす

解

やとらららららららららららららららららららららら

らららららららららららららららららららららららら

らららららららららららららららららららららららら

らららららららららららららららららららららららら

らららららららららららららららららららららららら

はれにらららららららららららららららららららららら

今更にまぢやるれど 又さりののりこ
よりこころしく ゆき

こころのちかきあきり ちかきあきり
とよりあひゆるえ ねふしんけとより合はし
こころ

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

まゆのちかきあきり ちかきあきり

いづれもまゝにらん 海は何となくとをさすもた
りてむろくのこころ 松はふた音にけり

下敷しよひうきしる 海はしよひさるる

あまのそとこころ みるくしりんとねね

かきあひりく 綿とりにてひりりす 丁よりゆ

さきあつたさる

いそぎのあししきつらふり 夕音明石飛ぶのゆ

まろふ

まをのまをし 飛ぶ空ののこころしきしき

さけののしりりとてんかふ

雲井の鳥のいづれもかろのさすしき
あつたさるるさるるのこころ 明石飛ぶの程しき

かきしけたりとつらむら 砂 砂 砂 砂 砂
こころのまをさるるさるるさるる

こころのまをさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるる

さるるさるる 又ねり

皇朝百三牧

